

3. コミュニケーション部門

2003年6月にそれまでの広報部門をコミュニケーション部門に再編して以降、100周年の2014年までの12年間、コミュニケーション部門は、社会コミュニケーション委員会、土木の日実行委員会および土木学会誌編集委員会の3委員会体制で主に活動を進めてきた。

表 3.1 社会コミュニケーション委員会の歴代委員長（2015～2015）

任期（年度）	委員長	任期（年度）	委員長
2014	中井 雅彦（東日本旅客鉄道）	2015	熊本 義寛（東日本旅客鉄道）

表 3.2 土木の日実行委員会の歴代委員長（2014～2015）

任期（年度）	委員長	任期（年度）	委員長
2014	山田 邦博（国土交通省）	2015	池田 豊人（国土交通省）

3.1 土木広報戦略会議と土木広報センター（2015～）

土木学会は2014年に「社会と土木の100年ビジョンーあらゆる境界をひらき、持続可能な社会の礎を築くー」を策定した。本ビジョンは「土木界、土木学会、土木技術者が今から行動すべき事柄を示したもの」との位置付けであり、第6章に「社会とのコミュニケーションの推進」として「①市民、メディアとのコミュニケーションの推進ー不言実行から有言実行へー②社会の技術リテラシー向上への貢献」を掲げ、「土木広報センター（仮称）」について以下のように言及した。

- ・土木界の各者が一体となって社会とのコミュニケーションに当たる「土木広報センター（仮称）」の設置について検討し、推進する。
- ・一般社会における理解度・リテラシーの向上に関係学術団体として貢献することは社会の強靱化の視点からも重要である。

それまで土木学会では、社会コミュニケーション委員会の下に「土木広報アクションプラン小委員会」を設置して土木広報戦略について検討し、2013年7月に土木広報の参考書ともいえるべき報告書「土木広報アクションプラン「伝える」から「伝わる」へ」を取りまとめた。同報告書では、33項目のアクションプランのほか、関係者一人ひとりの広報マインドの定着、アクションプランの実行、土木広報インフラの構築などが提案された。これを実現すべく、2014年3月に「土木広報戦略委員会」（委員長：野崎秀則（オリエンタルコンサルタンツ））及び「土木広報アクショングループ」を設置してさらに検討を進め、具体化のための構想を取りまとめ、「土木広報戦略会議及び土木広報センター設置構想」として、2014年度第5回理事会（2015年3月6日）に諮り承認された。

「土木広報戦略会議」は、土木界が一体となって取り組む広報戦略の基本方針を示す司令塔となる組織であり、「土木広報センター」はその方針に基づき、自らが主体となる活動の実施、各委員会や支部、関係団体が主体となって行う活動との連携・調整、情報共有・発信などを行う組織である。また、市民普請大賞など土木と市民との交流事業が多数展開された100周年事業について、それらを100周年記念の一過性のものではなく今後も継続していくこと、課題となっている土木界の担い手の確保・育成のために貢献することも構想に含んでいる。

(1) 土木広報戦略会議（2016年3月16日設置）

「土木広報戦略委員会」と「土木の日」および「くらしと土木の週間」の行事の実施について審議する「土木の日実行委員会」を統合し、土木界の広報戦略を一元化出来る横断的な「土木広報戦略会議」とし、産官学、関係団体の新協力体制を構築した。委員長はコミュニケーション部門主査理事として、土木学会会長が出席する会議と位置付け、英文名称は Communications and Public Relations Council とした。土木広報戦略会議の歴代委員長は表 3.1.1 のとおりである。

表 3.1.1 土木広報戦略会議の歴代委員長（2015～2024）

任期（年度）	委員長	任期（年度）	委員長
2015～2016	熊本 義寛（東日本旅客鉄道）	2021～2022	今井 政人（東日本旅客鉄道）
2017～2018	浅見 郁樹（東日本旅客鉄道）	2023～2024	小山 宏（東日本旅客鉄道）
2019～2020	大西 精治（東日本旅客鉄道）		

2015年度土木広報戦略会議においては、土木広報に関する連携・連絡体制を整理したほか、土木学会支部および関係団体の広報活動の実績を調査・分析するとともに、今後の重点的な取り組み方針として、土木広報アクションプランに基づく10項目のファストプランを提案した。さらに、土木広報アクションプランの推進に向けた3つのキーワード——①くらしと土木②伝えるから伝わるへ③知りたくなる土木——を提案し、次の土木広報指針を申し合わせた。

- (1) 私たちは「くらし」を支えている「土木」を広報します。
- (2) 私たちは「伝える」広報から「伝わる」広報を目指します。
- (3) 私たちは「知りたくなる土木」を広報します。

2017年度には、各団体の広報活動の計画の活用方法として、一般向けの土木関連行事の検索と現場見学マッチング機能を持つWebサイト「土木i：どぼくアイ～土木の情報源～」(<https://doboku-i.jp/>)を製作し、2017年4月14日より運用を開始した。

また、1987年11月18日に「土木の日」を制定してから、2017年11月18日で30周年を迎えたことを機に「土木の日」ロゴマーク（図 3.1.1）を策定した。「土木の日」関連行事を行う全ての団体、行政など土木界全体がこのロゴマークを用い、土木との触れ合いを通じて、土木技術および土木事業に対する認識と理解を深め、社会資本整備の意義と重要性について幅広いコンセンサスを形成されていくことを期待してのことである。



図 3.1.1 「土木の日」ロゴマーク

その後、「土木の日」ロゴマークを用いたグッズ（ステッカー、ピンバッジ、うちわ等）を製作して、各イベントで配布するなど、普及に努めている。

2018年度には、第1回「土木広報大賞」を主催した。主催の目的は次のとおりである。

“土木広報大賞は、日本全国の各地域で展開されている様々な広報のうち、暮らしを支えている土木の役割・意義・魅力について広報を行っている活動または作品などで他団体の模範となるもの、他団体への展開が期待されるものなどを取り上げ、顕彰することを目的として行うものです。なお、土木広報活動、作品の対象として、近年重要度が高まっている防災・減災分野、インフラの維持管理・更新、環境保全分野などの内容も含むものとします。”

「土木広報大賞」(<https://koho-taisho.jsce.info/>)は、続く2019年度、2021年度、2023年度と継続的に実施した。直近の2023年度では、最優秀賞1点、イベント部門、映像・メディア部門、広報ツール・アイテム部門、教育・教材部門、商業広告部門、企画部門の6部門それぞれに優秀賞数点を選定している。

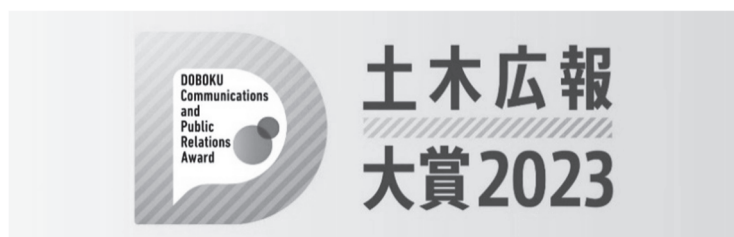


図 3.1.2 「土木広報大賞」ロゴマーク

1) 土木広報大賞 2018（選考委員長：田中里沙（事業構想大学院大学））

- ・応募総数 99 件、最優秀賞 1 件「どぼくカフェ」（フォーラム・シビル・コスモス（FCC））、優秀賞 2 件、準優秀賞 5 件、審査員賞 8 件の計 16 団体の表彰式（2018 年 11 月 12 日）を行った。

2) 土木広報大賞 2019（選考委員長：田中里沙（事業構想大学院大学））

- ・応募総数 122 件、最優秀賞 1 件「東京地下ラボ（若者向け東京下水道発信事業）」（東京都下水道局）、優秀部門賞（6 件）、準優秀部門賞（10 件）の計 17 団体の表彰式（2019 年 11 月 18 日）を行った。

3) 土木広報大賞 2021（選考委員長：田中里沙（事業構想大学院大学））

- ・応募総数 106 件、最優秀賞 1 件「四国防災八十八話マップ」（四国防災八十八話普及・啓発研究会）、優秀部門賞 6 件、準優秀部門賞 11 件、特別賞 3 件の計 21 団体の表彰式（2022 年 3 月 28 日）を行った。

4) 土木広報大賞 2023（選考委員長：田中里沙（事業構想大学院大学））

- ・応募総数 73 件、最優秀賞 1 件「ももいろインフラ-Z（ももいろインフラ-Z 広報協議会）、優秀部門賞 6 件、準優秀部門賞 11 件、特別賞 1 件の計 19 団体の表彰式（2024 年 2 月 26 日）を行った。

土木広報戦略会議の運営は、年数回の幹事会開催、年 1～2 回の土木広報戦略会議開催とし、全国の土木広報事例紹介、2011 年に公表された「土木広報アクションプラン」のアクションプランの実施状況報告を主たる討議事項としている。

(2) 土木広報センター（2015 年 6 月 15 日設置）

土木広報センター（センター長：依田照彦（早稲田大学））は、土木界では「土木の日」および「くらしと土木の週間」を制定した 1987 年に組織された土木学会企画広報室（1987 年～2005 年）の後、土木

界の広報活動を支える常設組織の設置は10年ぶりであり、2012年に設置された国際センターと同様の実務型のセンター組織である。社会コミュニケーション委員会、土木広報アクショングループ及び事務局を核に土木広報センターを構成し、土木広報の窓口を一元化した。

土木広報センターの英文名称は Communications and Public Relations Center とした。土木広報センターの正式表記は Communications and Public Relations Center, Japan Society of Civil Engineers とし、簡易表記は JSCE Communications and Public Relations Center, または JSCE CPR Center とした。

土木広報センター内の小委員会に相当する実行組織は、2015年設立当初、以下のグループで構成した。

1) 企画グループ（グループ長：大幢勝利（労働安全衛生総合研究所））

土木広報戦略の検討・立案、報道機関懇談会、全国大会企画等従来の本部事業

2) 情報集約・発信グループ（グループ長：小松淳（日本工営））

情報収集および情報発信、土木学会 Facebook ページ運営、学会サイト群運営支援等、従来機能を強化

3) 社会インフラ解説グループ（グループ長：緒方英樹（全国建設研修センター））

インフラに係わる正確な情報、解説の展開、土木のパンフレット・シリーズ、土木史・土木遺産他、出版・映像企画支援（土木広報チャンネルの運営含む）、2017年度に「土木リテラシー促進グループ」と改名し、2018年度には解説委員によるインフラ解説を実施する「インフラ解説グループ」を独立

4) 市民交流グループ（グループ長：島谷幸宏（九州大学））

土木の日事業（土木の日シンポジウム、土木の日（支部事業））、土木 a la mode、100周年継続事業（未来のT&Iコンテスト、市民普請大賞、土木コレクション、どぼくカフェ等、継続事業ごとにサブ・グループを組織）

5) 土木広報アクショングループ（グループ長：佐々木正（国土技術研究センター））

土木広報アクションプランのモニタリング及び推進（国語辞典、土木ツアー等）

6) 土木の魅力グループ（グループ長：川上佐知（復建調査設計））

当初、社会コミュニケーション委員会、教育企画・人材育成委員会、建設マネジメント委員会合同の次世代技術者対応グループを構想するも、100周年継続事業の一つである「土木ふれあいフェスタ」を継承し、土木の魅力を次世代に伝えることを目的とした「オープンキャンパス土木学会」を実施するグループとして2017年度に組織化

土木広報センター組織は、非常勤のセンター長、次長（産官学）と常勤のセンター職員（土木学会職員、出向者、派遣要員）、及び上記各グループ・グループ員で構成した。表 3.1.2 に歴代のセンター長、表 3.1.3 に歴代グループ長、表 3.1.4 に個別に委嘱状を発行した役職を示す。

表 3.1.2 土木広報センターの歴代センター長（2015～2024）

任期（年度）	センター長	任期（年度）	センター長
2014～2019	依田 照彦（早稲田大学）	2020～	小松 淳（日本工営）

表 3.1.3 土木広報センターの歴代グループ長（2015～2024）

活動	グループ名	グループ長	活動年度	備考
	土木広報アクション G	佐々木 正	2015～2017	2017 年度：情報集約・発信グループへの統合
	企画 G	大幡 勝利	2015～2017	2017 年度：情報集約・発信グループへの統合
	情報集約・発信 G	小松 淳	2015～2023	2023 年度グループ改編，活動終了
○	ドボクのラジオ G	松田 光弘	2019～	
○	土木学会 tv G	小松 淳	2021～	
○	from DOBOKU G	出水 享（編集長）	2021～2022	2022 年度：体制変更により編集長終了
		松永 昭吾（委員長）	2021～	
○	土木リテラシー促進 G	緒方 英樹	2015～2019	2017 年度：「社会インフラ解説グループ」から名称変更
		鈴木 三馨	2020～	
	インフラ解説 G	島谷 幸宏	2017～2023	2017 年度：構想時「解説委員会」を「インフラ解説グループ」に名称決定，2023 年度グループ改編：土木学会 tv G の SWG として継続
○	若手パワーアップ G	三木 拓也	2023～	2023 年度新設：旧企画委員会若手パワーアップ小委員会の活動継続
○	インフラパートナー G	三村 昇（委員長）	2024～	2024 年度新設：旧シビル NPO 推進小委員会の活動終了，新たな活動開始
	市民交流 G	島谷 幸宏	2015～2017	2023 年度グループ改編：活動終了
		高橋 良和	2017～2023	
	どぼくカフェ G	高橋 良和	2015～2023	2023 年度グループ改編：センター内活動終了
○	土木の魅力 G	川上 佐知	2018～	
	土木の日実行 G	真田 純子（幹事長）	2016～2023	2023 年度第グループ改編：「土木の日事業グループ」に統合
○	未来の土木コンテスト G	宮田 喜壽	2015～2019	
		高橋 良和	2019～	
○	土木の日事業 G	樋口 明彦	2015～2019	2023 年度グループ改編：「土木コレクショングループ」から名称変更
		小松 淳	2020～	
○	市民普請 G	萱場 祐一（幹事長）	2015～2018	2023 年度グループ改編：「土木の日事業グループ」に統合または活動終了を検討中
		中村 圭吾（幹事長）	2019～	

表 3.1.4 土木広報センター長が委嘱した役職（2015～2024）

委嘱した役職名称	受嘱者	委嘱日
土木広報大使	元気丸（水戸 竜司，北岡 一成）	2020 年 11 月 18 日～2024 年 11 月 6 日
	元気丸北岡（北岡 一成）	2024 年 11 月 7 日～

なお，社会コミュニケーション委員会が担っていたコミュニケーション部門の部門会議の役割を強化し，「土木広報連絡会議」（2016 年 1 月 21 日設置）として，土木学会内各組織，各支部の広報活動連携強化を図った。

(3) 土木広報センターの活動記録

2015年度から2024年度までの土木広報センターの活動記録を以下に列挙する。

1) 2015年度

- ・BS朝日の番組「週間記念日」と「未来を拓く土木の力〜ドボジョーが見た！世界 震災復興 未来〜」への企画協力および制作支援。
- ・報道機関懇談会を3回（通算44回）開催し、「土木学会ダイバーシティ＆インクルージョン行動宣言」等のテーマについての意見交換実施。
- ・情報収集および情報発信を目的とした、映像記録・ライブ中継用機材の整備、テレビ放送を記録保存するための機器・テレビ会議積極的導入のための機器の充実。
- ・土木学会 Facebook ページのファン獲得（年度当初の15,000名から年度末に19,000名に）と、有料広告の継続実施。
- ・100周年記念事業の市民交流事業として行った「市民普請大賞」グランプリ受賞活動に関するシンポジウム「市民普請大賞全国交流会議2015」（2015年8月22～23日）の開催。
- ・旅行会社と連携した現場見学ツアー（東京湾横断道路・南本牧埠頭）を1回（通算7回）開催。
- ・本部、各支部で展開される「土木の日」および「くらしと土木の週間」の各種活動を例年通り実施した。本部行事としては、今年度も土木の日シンポジウム2015「土木と市民参加」・土木偉人映像展「久保田豊」（2015年11月18日）を開催するとともに「土木コレクション2015 Rivers and Bridges」（2015年11月19～22日）を新宿駅西口広場イベントコーナーにて開催した。

2) 2016年度

- ・熊本地震（2016年4月14日発生）に対して、会長特別調査団に同行するとともに、現地における記者会見の運営に協力した。
- ・報道機関懇談会を3回（通算47回）開催し、「インフラ健康診断書」「オンライン博物館“ドボ博”の本格オープン」等のテーマについての意見交換を実施した。
- ・土木界の旬な話題を取り上げる一般向けのトーク企画「土木 a la mode」（2017年3月23日）では、「撮ることで気づくこと、描くことで気づくこと、ぼくらドボク楽しんでいきます。」をテーマに開催した。
- ・情報収集および情報発信を目的とした、画像・映像記録ならびにライブ中継用機材の整備、画像・映像編集のための機器の充実、サテライト会場への映像配信設備の導入を行った。
- ・土木学会 Facebook ページのファン獲得（年度当初の19,000名から年度末に26,000名に）と、有料広告の継続実施を行った。
- ・科学技術振興機構の動画専門サイト「サイエンスチャンネル」における「科学の遺産と未来（2）水のインフラ【後編】不毛の大地に水を 台湾・嘉南平原」に製作協力した。また、旅行会社と連携した台湾土木遺産視察第4弾（2016年10月19～22日）を実施し、参加者の好評を得た。
- ・本部、各支部で展開される「土木の日」および「くらしと土木の週間」の各種活動を例年通り実施した。本部行事としては、「土木コレクション2016 あなたは橋派？鉄道派？」（2016年11月21～24日）を新宿駅西口広場イベントコーナーにて開催するとともに、「市民普請大賞2016」と土木偉人映像展「行基」の二部構成からなる「土木の日シンポジウム2016」（2016年11月23日）を開催した。また、11月18日当日、日刊スポーツ紙に「ダムが舞台の仕事漫画」とコラボレーションした「土木の日」の広告を掲載した。

3) 2017 年度

- ・学会内の活動を積極的に外へ発信するために、これまで以上にニュースリリースを配信するとともに、報道機関懇談会を3回（通算50回）開催して「平成28年度会長特別タスクフォース『現場イノベーションプロジェクト』」や「オープンキャンパス土木学会2017」等のテーマについて意見交換を行った。
- ・情報収集および情報発信の一環として、ライブ中継用機材の整備を行うとともに、Skypeを利用した本部行事の支部双方向ライブ配信を実施した。
- ・土木学会 Facebook ページのファン獲得（年度当初の26,000名から年度末に31,000名に）と有料広告を継続実施した。
- ・国語辞典における土木の意味と用例の提案・普及を行うため、国語学者ならびに出版社（辞書の編集者）との意見交換を実施した。
- ・普段は入ること、見ることのできない土木学会（四谷）の館内を一般開放し、様々な「土木」の体験をすることができる「オープンキャンパス土木学会」（2017年7月8日）を初開催し、小学生を中心とした親子連れの来場者が多数訪れた。
- ・旅行会社と連携した台湾土木遺産視察第5弾（2017年10月10～14日）を実施した。
- ・本部、各支部で展開される「土木の日」および「くらしと土木の週間」の各種活動を例年通り実施した。本部行事として、土木コレクション2017「未来の東京を見つけに、土木を巡る。」（2017年11月20～24日）を新宿駅西口広場イベントコーナーにて開催するとともに、「土木学会の挑戦 ー地方創生に向けた「安寧の公共学」を目指してー」と題したパネルディスカッションと土木偉人映像展「古市公威」の二部構成からなる「土木の日シンポジウム2017」（2017年11月23日）を土木学会講堂にて開催した。また、11月18日当日、日刊スポーツ紙にダムが舞台の仕事漫画「昼間のパパは光ってる」とコラボレーションした「土木の日」の広告を掲載した。
- ・日本建設業連合会、日本科学未来館の協力のもと、2017年7月の募集開始から2018年1月20日の最終選考会・表彰式まで、子供たちの夢のアイデアを土木エンジニアがカタチにする「未来の土木コンテスト」（選考委員長：高橋良和（京都大学））を実施した。
- ・土木偉人48人の功績と魅力を絵札と読み札のかかるたで楽しく学べる「土木偉人かるた」を2018年3月1日から販売開始した。

4) 2018 年度

- ・学会内の活動を積極的に外へ発信するために、これまで以上にニュースリリースや記者会見を実施するとともに、報道機関懇談会を2回（通算52回）開催して「平成29年度会長特別委員会『国土・土木とAI懇談会』の検討成果」と「平成30年度土木学会会長による情報発信プロジェクト」等のテーマについて意見交換した。
- ・日本橋「街道観光展2018」への展示協力に際し「中央エフエム」に出演し、イベント告知を行うとともに、「土木広報大賞」ならびに「土木偉人かるた」の普及活動の一環として「渋谷のラジオ」に出演した。
- ・土木学会 Facebook ページのファン獲得（年度当初の31,000名から年度末に35,000名に）と有料広告を継続実施した。
- ・国語辞典における土木の意味と用例の提案・普及を行うため、引き続き、継続的に調査するなど、時機をとらえて成果を上げるべく活動を続けた。
- ・普段は入ること、見ることのできない土木学会（四谷）の館内を一般開放し、様々な「土木」の体験

をすることができる「オープンキャンパス土木学会 2018」(2018 年 7 月 7 日)を開催した。

- ・旅行会社と連携した台湾土木遺産視察第 6 弾(2018 年 12 月 6～8 日)を実施した。
- ・本部、各支部で展開される「土木の日」および「くらしと土木の週間」の各種活動を例年通り実施した。本部行事では、東京オリンピックをテーマとした「土木コレクション 2018『TOKYO DOBOKU FROM-1964-TO 過去から未来、新しいトウキョウへ。』」(2018 年 11 月 20～23 日)を新宿駅西口広場イベントコーナーにて開催するとともに、「地域インフラと市民普請～農山村・漁村における市民連携～」と題した講演および討論を行う「土木の日シンポジウム 2018」を土木学会講堂にて開催した。また、11 月 18 日当日、日刊スポーツ紙にダムを舞台にした仕事漫画「昼間のパパは光ってる」とコラボレーションした「土木の日」の広告を掲載した。
- ・近年話題となっているインフラに関する用語について、土木学会の解説委員が分かりやすく説明する「インフラ解説動画」では、橋梁分野と河川分野の 10 のトピックを取り上げ、YouTube に公開した。
- ・インフラに関する用語について、土木学会の解説委員が分かりやすく説明する「インフラ解説動画」では、橋梁分野(解説委員：依田照彦(早稲田大学))と河川分野(解説委員：島谷幸宏(九州大学))のトピックを取り上げ、2018 年 12 月 20 日 YouTube に公開した。

5) 2019 年度

- ・学会内の活動を積極的に外へ発信するために、これまで以上にニュースリリースや記者会見を実施するとともに、報道機関懇談会を 2 回(通算 54 回)開催して「平成 30 年度土木学会会長の活動報告」「令和元年度土木学会会長の活動報告」「オンライン土木博物館(通称：ドボ博)」等のテーマについて意見交換した。
- ・「中央エフエム」(東京都中央区の地域コミュニティ FM ラジオ局)において、インフラに関する旬な話題や土木の魅力を分かりやすく伝えることを目的に、土木学会と(株)建設技術研究所の提供で、土木技術者自ら企画・制作・出演まで行うという画期的なラジオ番組「ドボクのラジオ」を 2019 年 5 月 1 日から開始した。「土木偉人かるた」の普及活動の一環として「渋谷のラジオ」に出演した。
- ・土木学会 Facebook ページのファン獲得(年度当初の 35,000 名から年度末に 40,000 名に)と有料広告を継続実施した。
- ・「国語辞典における土木の意味と用例の提案・普及」の継続的な活動と「土木」ということばの歴史的な変遷についての詳細な調査研究による出版各社への働きかけの成果として、「大辞林第四版」(2019 年 9 月 5 日発売)の「土木」の項目がこれまでとは一線を画す内容に改訂された。
- ・普段は入ること、見ることのできない土木学会(四谷)の館内を一般開放し、様々な「土木」の体験をすることができる「オープンキャンパス土木学会 2019」(2019 年 7 月 6 日)を開催した。
- ・旅行会社と連携した台湾土木遺産視察第 7 弾(2019 年 12 月 4～7 日)を実施した。
- ・本部、各支部で展開される「土木の日」および「くらしと土木の週間」の各種活動を例年通り実施した。本部行事では、東京オリンピックをテーマとした「土木コレクション 2019『TOKYO DOBOKU FROM-1964-TO 過去から未来、新しい TOKYO へ』」(2019 年 11 月 14～17 日)を新宿駅西口広場イベントコーナーにて開催するとともに、「市民普請」で地方をよみがえらせる-市民主導の新しい公共事業の仕組みを考える-と題した講演および討論を行う「土木の日シンポジウム 2019」(2019 年 11 月 24 日)を土木学会講堂にて開催した。また、11 月 18 日当日、日刊スポーツ紙に漫画家の羽賀翔一氏とコラボレーションした「土木の日」の広告を掲載した。
- ・インフラに関する用語について、土木学会の解説委員が分かりやすく説明する「インフラ解説動画」では、土砂災害分野(解説委員：藤井俊逸(藤井基礎設計))と地震分野(解説委員：高橋良和(京都

大学)) のトピックを取り上げ、2020 年 3 月 12 日 YouTube に公開した。

6) 2020 年度

- ・学会内の活動を積極的に外へ発信するために、ニュースリリースや記者会見を実施するとともに、報道機関懇談会を 2 回（通算 56 回）開催して「令和元年度土木学会会長の活動総括」「会長特別委員会「インフラメンテナンス（鉄道）特別委員会の活動成果」「2020 年度土木学会会長の活動報告」等のテーマについて意見交換した。
- ・インフラに関する旬な話題や土木の魅力を分かりやすく伝えることを目的に 2019 年 5 月より「中央エフエム」においてスタートしたラジオ番組「ドボクのラジオ」を継続するとともに、放送音源を番組 Web サイト (<https://doboradi.jsce.or.jp/>) および YouTube サイトにアーカイブ化し、いつでも視聴可能とした。
- ・土木学会 Facebook ページのファン獲得（年度当初の 40,000 名から年度末に 45,000 名に）と有料広告を継続実施した。
- ・JSCE2020 プロジェクトの一環として、土木学会の独自メディアである「土木学会 tv」(<https://www.youtube.com/jscetv>) を 2021 年 3 月 15 日よりスタートさせ、学会におけるニュース映像やインタビュー映像、オリジナルの解説動画等のコンテンツを制作・配信し、適時適切な情報発信のための仕組みを整備した。
- ・国土・インフラに係る市民グループ等と土木学会が連携・協力し、地域のインフラの質的向上を図るため、「土木学会インフラパートナー制度」(2021 年 3 月 23 日) を創設し、16 団体との合意書を締結した。
- ・本部、各支部で展開される「土木の日」および「くらしと土木の週間」の各種活動を COVID-19 災禍の状況を考慮し、開催可能なイベントについて実施した。本部行事では、「持続可能な地域づくりにおける市民普請の可能性」と題した講演および討論を行う「土木の日シンポジウム 2020」(2020 年 11 月 21 日) をオンライン配信により開催した。11 月 18 日当日、日刊スポーツ紙に漫画家の羽賀翔一氏とコラボレーションした「土木の日」の広告を掲載するとともに、土木学会講堂で、オール土木ネタの個性派芸人「元気丸」に「土木広報大使（土木漫才で土木の魅力を伝えること）」委嘱式を開催した。
- ・COVID-19 災禍により開催できなかった土木コレクションについては、Web 空間上にバーチャルで展示する「ドボコレミュージアム」として公開できるように、準備を進めている。

7) 2021 年度

- ・学会内の活動を積極的に外へ発信するために、ニュースリリースや記者会見を実施するとともに、Facebook をはじめとする SNS を活用した情報配信に努めた。また、土木学会 Facebook ページのファン獲得（年度当初の 45,000 名から年度末に 47,000 名に）のため有料広告を継続実施した。
- ・インフラに関する旬な話題や土木の魅力を分かりやすく伝えるラジオ番組「ドボクのラジオ」は、放送開始から 3 年が経ち、これまでの放送音源(148 回分)を番組 Web サイト (<https://doboradi.jsce.or.jp/>) および YouTube サイトにアーカイブ化し、いつでも視聴可能としている。
- ・JSCE2020 プロジェクト「土木映像の蓄積と活用」の一環として、2021 年 3 月にスタートした土木学会の独自メディアである「土木学会 tv」(<https://www.youtube.com/jscetv>) は、学会内の活動を映像で配信・蓄積するためのプラットフォームとして、「インフラ解説動画」「となりの現場めし」「土木学会誌チャンネル」等のオリジナル動画を公開するとともに、「土木偉人イブニングトーク」「全国大会スペシャル番組」「土木の日シンポジウム 2021」等の各種イベントをオンライン配信・アーカイブ公

開した。

- ・小学生向けのオンライン型体験イベントとして、夏休みの自由研究に活用できることを念頭においた『今年の夏は、おうちで土木』～めざせ！未来のどぼく博士!!～（2021年7月17日・8月21日）を開催し、コロナ禍においても双方向でコミュニケーションを取りながら土木を学べる場を提供した。
- ・本部、各支部で展開される「土木の日」および「くらしと土木の週間」の各種活動は、オンラインをはじめとする様々なツールを活用しながら、開催可能なイベントについて実施した。本部行事では、「グリーンインフラと市民普請～自然のなかでいきる技術のあり方～」と題した講演および討論を行う「土木の日シンポジウム 2021」をオンライン配信により開催した。また、11月18日当日、日刊スポーツ紙に漫画家の羽賀翔一氏とコラボレーションした「土木の日」の広告を掲載した。さらに、土木コレクションについては、土木に関する貴重な写真や図面、歴史資料を Web 空間上にバーチャルで展示する「ドボコレミュージアム」を同日公開した。
- ・インフラに関する用語について、土木学会の解説委員が分かりやすく説明する「インフラ解説動画」では、下水道分野（解説委員：古米弘明（東京大学））とコンクリート分野（解説委員：伊代田岳史（芝浦工業大学））のトピックを取り上げ、2022年1月26日 YouTube に公開した。
- ・土木のことをカジュアルに噛み砕いたユニークな形で届けることを目的に、土木工学の専門家やインフラ管理支援ボランティア、土木工学を志す学生たちが文章、写真、イラスト、動画、音声配信などのコンテンツを発信していく土木学会 Web 情報誌「from DOBOKU」は、note というメディア上で2021年4月から活動を開始した。のちに、この編集メンバーを「from DOBOKU グループ」として組織化した。

8) 2022 年度

- ・学会内の活動を積極的に外へ発信するために、ニュースリリースや記者会見を実施するとともに、Facebook をはじめとする SNS を活用した情報配信に努めた。また、土木学会 Facebook ページのファン獲得（年度当初の 45,000 名から年度末に 47,000 名に）のため有料広告を継続実施した。
- ・インフラに関する旬な話題や土木の魅力を分かりやすく伝えるラジオ番組「ドボクのラジオ」は、放送開始から4年が経ち、これまでの放送音源(200回分)を番組 Web サイト (<https://doboradi.jsce.or.jp/>) および YouTube サイトにアーカイブ化し、いつでも視聴可能としている。
- ・JSCE2020 プロジェクト「土木映像の蓄積と活用」の一環として、2021年3月にスタートした土木学会の独自メディアである「土木学会 tv」(<https://www.youtube.com/jsctv>) は、学会内の活動を映像で配信・蓄積するためのプラットフォームとして、「インフラ解説動画」「となりの現場めし」「土木学会誌チャンネル」等のオリジナル動画を公開するとともに、「土木偉人イブニングトーク」「全国大会動画企画」「未来の土木コンテスト 2022」「全国土木弁論大会」等の各種イベントをオンライン配信・アーカイブ公開した。
- ・小学生向けのオンライン型体験イベントとして、夏休みの自由研究に活用できることを念頭においた『今年の夏は、おうちで土木 2022』～めざせ！未来のどぼく博士!!～（2022年7月23日・8月20日）を開催し、コロナ禍においても双方向でコミュニケーションを取りながら土木を学べる場を提供した。
- ・伝統的なスピーチ競技である「弁論」を通じて、土木の重要性や魅力を言語化し、自身の価値観とともに発表する全国土木弁論大会「有馬優杯」を2022年9月21日に初開催した。弁士は事前に全国青年弁論大会最優秀賞など多数の受賞歴がある有馬優氏による「ことばの講座」を受講して大会に臨んだ。

- ・日本建設業連合会，日本科学未来館の協力のもと，小学生から「未来のまちの姿」についてのアイデアを募集し，一次選考を通過したアイデアに対してプロの土木技術者が検討チームに加わって検討成果をプレゼンテーション，審査する「未来の土木コンテスト 2022」（選考委員長：松永昭吾（インフラ・ラボ））の最終選考会・表彰式を 2023 年 1 月 29 日に日本科学未来館において 5 年ぶりに開催した。
- ・本部，各支部で展開される「土木の日」および「くらしと土木の週間」の各種活動は，オンラインをはじめとする様々なツールを活用しながら，開催可能なイベントについて実施した。本部行事では，土木に関する歴史資料，図面，写真，映像等を展示する「土木コレクション 2022」（2022 年 11 月 22～25 日）を新宿駅西口広場イベントコーナーにおいて 3 年ぶりに開催した。また，11 月 18 日当日，日刊スポーツ紙に漫画家の羽賀翔一氏とコラボレーションした「土木の日」の広告を掲載した。
- ・2021 年 4 月に開始した土木学会 Web 情報誌「from DOBOKU」の編集体制を 2023 年 1 月 1 日から「ドボクのラジオ」，土木学会誌編集委員会の有志メンバーを加え，新体制とした。

9) 2023 年度

- ・学会内の活動を積極的に外へ発信するために，ニュースリリースや記者会見を実施するとともに，Facebook をはじめとする SNS を活用した情報配信に努めた。また，写真やイメージで訴求しやすい SNS である Instagram を 2023 年 9 月 1 日から運用開始した。
- ・インフラに関する旬な話題や土木の魅力を分かりやすく伝えるラジオ番組「ドボクのラジオ」は，放送開始から 5 年が経ち，これまでの放送音源（250 回分）を番組 Web サイト（<https://doboradi.jsce.or.jp/>）および YouTube サイトにアーカイブ化し，いつでも視聴可能としている。
- ・JSCE2020 プロジェクト「土木映像の蓄積と活用」の一環として，2021 年 3 月にスタートした土木学会の独自メディアである「土木学会tv」（<https://www.youtube.com/jsctv>）は，学会内の活動を映像で配信・蓄積するためのプラットフォームとして，「インフラ解説動画」「となりの現場めし」「土木学会誌チャンネル」等のオリジナル動画を公開するとともに，「土木偉人イブニングトーク」「全国大会動画企画」「未来の土木コンテスト2022」「全国土木弁論大会」等の各種イベントをオンライン配信・アーカイブ公開した。
- ・伝統的なスピーチ競技である「弁論」を通じて，土木の重要性や魅力を言語化し，自身の価値観とともに発表する全国土木弁論大会 2023「有馬優杯」を 2023 年 7 月 7 日に開催した。
- ・「土木学会 tv」上に初めての土木学会紹介動画「Join us!」という約 5 分間のプロモーション動画を 2023 年 7 月 14 日に公開した。
- ・普段は入ること，見ることのできない土木学会（四谷）の館内を一般開放し，様々な「土木」の体験をすることができる「オープンキャンパス土木学会 2023」（2023 年 7 月 22 日）を 3 年ぶりに開催した。
- ・本部，各支部で展開される「土木の日」および「くらしと土木の週間」の各種活動は，オンラインをはじめとする様々なツールを活用しながら，開催可能なイベントについて実施した。本部行事では，土木に関する歴史資料，図面，写真，映像等を展示する「土木コレクション 2023」（2023 年 11 月 21～24 日）を新宿駅西口広場イベントコーナーにおいて開催した。また，11 月 18 日当日，日刊スポーツ紙に漫画家の羽賀翔一氏とコラボレーションした「土木の日」の広告を掲載した。

10) 2024 年度

- ・学会内の活動を積極的に外へ発信するために，ニュースリリースや記者会見を実施するとともに，

Facebook, Instagram をはじめとする SNS を活用した情報配信に努めた。土木学会 Facebook ページのファン数は 2024 年 9 月末時点で 47,500 人である。

- ・インフラに関する旬な話題や土木の魅力を分かりやすく伝えるラジオ番組「ドボクのラジオ」は、放送開始から 6 年が経ち、これまでの放送音源(300 回分)を番組 Web サイト(<https://doboradi.jsce.or.jp/>)および YouTube サイトにアーカイブ化し、いつでも視聴可能としている。
- ・伝統的なスピーチ競技である「弁論」を通じて、土木の重要性や魅力を言語化し、自身の価値観とともに発表する全国土木弁論大会 2024「有馬優杯」を 2024 年 7 月 9 日に開催した。
- ・普段は入ること、見ることのできない土木学会（四谷）の館内を一般開放し、様々な「土木」の体験をすることができる「オープンキャンパス土木学会 2024」（2024 年 7 月 20 日）を開催した。
- ・本部、各支部で展開される「土木の日」および「くらしと土木の週間」の各種活動は、オンラインをはじめとする様々なツールを活用しながら、開催可能なイベントについて実施した。本部行事では、土木に関する歴史資料、図面、写真、映像等を展示する「土木コレクション 2024」（2024 年 11 月 21～23 日）を新宿駅西口広場イベントコーナーにおいて開催した。また、11 月 18 日当日、日刊スポーツ紙に漫画家の羽賀翔一氏とコラボレーションした「土木の日」の広告を掲載した。

（4）土木広報戦略会議および土木広報センターの展望

土木広報戦略会議では、2011 年に公表された「土木広報アクションプラン」のアクションプランの実施状況報告を主たる討議事項としてきたが、2024 年度に至り、33 のアクションプラン項目は目標を達成されつつあるとの認識である。今後、「土木広報アクションプラン」の見直しと再整理を進めるとともに、これまでの一般市民の理解促進に重きを置いた土木広報活動に加え、土木界の深刻な人手不足改善のための潜在的入職者に向けた土木広報活動へのアクションプラン更新作業を進めているところである。また、コロナ禍によって教育関係者向けの現場見学マッチング機能が十分に果たせなかったこともあり、土木の情報 Web サイト「土木 i」についても活用と運用方法の見直しを図る予定である。

直近の新たな動きとして、コミュニケーション部門以外でのこれまでの活動を土木広報センターで発展的に継続するものが複数ある。

土木学会創立 100 周年事業として実施された「若手土木技術者の交流サロン」の継続および若手土木技術者の活性化、学会全体の活動の活性化に向けた取り組み強化のために企画委員会内に 2015 年度に設置された「若手パワーアップ小委員会」は、楽しみながら防災を学ぶ「ポケドボカードゲーム」（2018 年 7 月 25 日発売）を開発するなど、さまざまな活動を進めてきた。本小委員会は、2023 年 12 月 1 日付で土木広報センター若手パワーアップグループ（グループ長：三木拓也（みずほリサーチ&テクノロジー））として移籍、再編された。

土木学会が市民団体との連携を目的に立ち上げた「インフラパートナー制度」の拡充を図るとともに、インフラパートナー相互の理解を深めるために 2024 年 4 月 1 日付で「インフラパートナーグループ」を設置した。活動の母体は、土木学会創立 100 周年記念事業の一環として、2014 年度に設立されたシビル NPO 連携プラットフォーム（CNCP）のリエゾン組織と位置付けられる教育企画・人材育成委員会 シビル NPO 推進小委員会である。この組織は、幅広い活動を通じて建設系 NPO 法人の基盤強化をはかり、行政や企業、教育、研究機関、そして地域・市民組織とのパートナーシップを通じて、より良い地域社会の構築を目指すものである。

2023 年度会長特別プロジェクト「土木の魅力向上プロジェクト」（田中茂義第 111 代会長）の「魅力ある土木の世界発信小委員会」（小委員長：松永昭吾（インフラ・ラボ））の活動には多くの新しい土木

広報活動が含まれており、「ドボ・シティ」カードゲームの製作には「若手パワーアップグループ」のメンバーが協力したり、「土木考究部」土木の魅力発信マップの製作に「土木リテラシー促進グループ」のメンバーが協力したり、と強い関係性がある。2024年度になって、「from DOBOKU グループ」に「魅力ある土木の世界発信小委員会」の主要メンバーが加わったこともあり、今後の発展的な土木広報活動の実施が期待される。

土木広報センターでは、支部との連携のもと、引き続き、土木学会および土木界が行う広報活動、全国各地で行われる一般向けの土木イベント、マスコミ報道等の情報集約および情報発信を行うとともに、ローカルメディアへのアプローチとしての「ドボクのラジオ」の継続的な企画・運営、学会独自メディア「土木学会 tv」の企画・運営・配信、一般向けに土木用語を解説する「インフラ解説動画」の分野充実、土木の魅力を発信する短編映像の制作やトークイベント、土木ツアーの実施、Web 情報誌「from DOBOKU」の企画・運営を実施する。

市民交流イベントでは、「土木コレクション」「土木の日シンポジウム」および「オープンキャンパス土木学会」等の実施にあたり、対面での実施を優先し、オンラインをはじめとする様々なツールも活用しながら推進する。

災害時の広報は、土木広報センター設立時から課題の一つであり、災害調査団への同行取材や災害調査報告会への支援などを実施しているが、今後、支部および関係部門、関係団体と連携し、より適切な情報発信と情報共有を行うことが必要である。

上記と活動の現状を踏まえ、実行グループに階層構造からフラット化して再編した。2024年度土木広報センターの組織構成は表 3.1.5 のとおりである。

表 3.1.5 土木広報センターの役職名・グループ名（2024～）

役職・グループ名	リーダー・グループ長
センター長	小松 淳（日本工営ビジネスパートナーズ）
センター次長（学）	高橋 良和（京都大学）
センター次長（官）	奥田 晃久（国土交通省）
センター次長（産）	松田 光弘（建設技術研究所）
ドボクのラジオグループ	松田 光弘（建設技術研究所）
土木学会 tv グループ	小松 淳（日本工営ビジネスパートナーズ）
from DOBOKU グループ	松永 昭吾（インフラ・ラボ）
土木リテラシー促進グループ	鈴木 三馨（オフィスドボク）
土木の魅力グループ	川上 佐知（復建調査設計）
若手パワーアップグループ	三木 拓也（みずほリサーチ&テクノロジーズ）
インフラパートナーグループ	三村 昇（エイト日本技術開発）
未来の土木コンテストグループ	高橋 良和（京都大学）
土木の日事業グループ	小松 淳（日本工営ビジネスパートナーズ）
市民普請グループ	中村 圭吾（土木研究所）

これまでの10年間の活動を担当する組織名と併せて整理した一覧表を表 3.1.6 に示す。

表 3.1.6 土木広報戦略会議および土木広報センターの主要行事（～2024）

主催行事 (実行グループ)	～2014 (100周年事業◎)	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024
報道機関懇談会 (土木広報センター)	41回	3回	3回	3回	2回	2回	2回				1回
土木の日シンポジウム (土木の日実行 G)	◎	○	○	○	○	○	○	○			
市民普請大賞 (市民普請 G)	◎		○		土木の日シンポジウムへ テーマ提供・実施協力						
土木コレクション ドボコレミュージアム (土木コレクション G)	◎	○	○	○	○	○	中止		○	○	○
								○	○	○	○
未来の土木コンテスト (未来の土木コンテスト G)	◎ (未来の T & I コンテスト)			○			延期		○		
どぼくカフェ (どぼくカフェ G)	◎	○	○	○	○	○	全国各地・各組織で開催				
オープンキャンパス土木学会 今年の夏は、おうちで土木 (土木の魅力 G)	◎ (土木ふれあい フェスタ)			○	○	○	中止			○	○
								○	○		
土木ツアー (台湾視察) (土木リテラシー促進 G)	◎ (3回)		○	○	○	○					○
全国大会広報企画・研究討論 会 (土木広報センター)	○	○	○	○	○		中止	○	○	○	
土木学会 Facebook ページ (土木広報センター)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
「土木の日」スポーツ新聞広告 (土木広報センター)			○	○	○	○	○	○	○	○	○
インフラ解説動画 (インフラ解説 G)					○	○		○			
土木広報大賞 (土木広報センター)					○	○		○		○	
ドボクのラジオ (ドボクのラジオ G)						47回	49回	52回	52回	52回	52回
土木学会 tv (土木学会 tv G)								○	○	○	○
全国土木弁論大会 (土木リテラシー促進 G)									○	○	○
東京都防災展 (協力：斜面工学小委員会)		○	○	○	○	○	中止				

3.2 土木学会誌編集委員会（2014-2024）

（1）委員会活動の経緯

本会の創立年である1914年の9月に設置され1915年2月に創刊号を発行し2024年にVol.109を迎えた本会最古の常置委員会である。2014年から2024年の間の委員長は表3.2.1のとおりである。2024年9月現在、委員長、副委員長2名、幹事長各1名、副幹事長2名、委員57名、特別委員1名、特任委員3名という構成である。表3.2.2に2014年以來の土木学会誌特集テーマの一覧を掲げる。なお、委員長は6月に就任し、2年間の任期を務めるが、土木学会誌の企画自体は発刊の約6か月前に決まるため、当該委員長の方針によって編集された土木学会誌が形になるのは、就任翌年の1月号以降となる。

表 3.2.1 土木学会誌編集委員会の歴代委員長（2014～2024）

任 期	委員長	任 期	委員長
2014～2015	清水 英範（東京大学）	2020～2021	羽藤 英二（東京大学）
2016～2017	館石 和雄（名古屋大学）	2022～2023	岩城 一郎（日本大学）
2018～2019	鎌田 敏郎（大阪大学）	2024～2025	堀田 昌英（東京大学）

各時代の編集方針は下記の通りである。はじめに、清水委員長は編集方針として、学会100周年を迎え「土木の原点」に立ち返って土木の公共性、土木技術の総合性を今一度強く意識し、その上で土木の未来を展望することを掲げた。特に東日本大震災からの復興に対して、土木が為し得る貢献が常に最重要課題と捉えられたこの時代において、土木の公共性や土木技術の総合性という観点から様々な関連特集等が掲載された。また、この時期には現在広く普及しているソーシャルネットワーキングサービスを活用する試みとして、フェイスブックの本格運用が始まっている。

続く館石委員長の編集方針は、土木において専門分野の細分化が進んだ状況に鑑み、様々な分野間をつなぐ媒体として土木学会誌を位置付けるものであった。各分野の最新動向や時宜を得た情報を、専門外の会員にも分かりやすく提供することを目指した。加えて、新たな社会課題に対して土木以外の分野との協働が一層求められる情勢となったことを踏まえ、土木と他分野の境界領域に着目した。特集においても、維持管理分野のイノベーションやAI活用など、その後に主流化していく分野融合の先駆けとなるテーマが取り上げられている。

鎌田委員長は、前体制の「土木を内側へ、外側へつなぐ」編集方針を踏襲しつつ、さらに土木を「時を超えて明日へつなぐ」ことを学会誌の使命として掲げた。特集においても、未来の教育手法、人口減少・都市縮退の時代における土木の役割、建設業の働き方改革など、将来に向けて今後土木がどのようなべきかを模索するテーマが多く取り上げられた。この時期に元号が平成から令和に移行しており、平成の振り返りを含めて時代の変化を感じさせる誌面構成となっている。

羽藤委員長は方針として「編集の多様性」を掲げた。編集委員会や執筆者の構成、編集のプロセス等で多様性と社会的包摂(Diversity & Inclusion : D&I)に配慮することに加え、学会誌でどんな話題を取り上げるかは土木の価値観それ自体を表象するとして、努めて多様性の確保に取り組んだ。特に、今後一層活躍が期待されている土木分野の新たな担い手層(“Ally”)に向けたメッセージや特集記事が数多く掲載された。

岩城委員長は3つの編集方針として、「土木と人」「外から見た土木」「地域と土木」を掲げた。「土木と人」については、土木のあらゆる営みが一人一人の取り組みから成り立っていることを改めて想起させる、人にまつわる様々な描写や物語が取り上げられた。「外から見た土木」では、国外や分野外の視点からわが国の土木分野を客観視しつつ、自らの将来像を模索していこうという取り組みが見られる。「地域と土木」については、今後の国土構造、人口動態等を見据えつつ、地域社会を守っていくための土木の使命を伝えようとする特集・記事がある。

これに続いた堀田委員長は、編集方針を「広がる土木の今をとらえる」として、社会課題の解決に求められる土木の役割が一層広がり、また社会基盤の概念自体も広がっていることを踏まえて、進化する土木の姿を伝えることを掲げた。これまでの歴史を踏まえつつ、変わるべきこと、変わらざるべきことは何かを率直に議論できる開かれた場として学会誌を位置付けることを目指した。

今後は、土木学会誌のコンテンツのデジタル化、他分野・他メディア等との連携の強化、持続可能な編集体制の環境整備等、喫緊の課題と共に中長期的な課題に継続して取り組んでいく必要がある。

表 3.2.2 土木学会誌の特集テーマ一覧

特集テーマ	登載年月
社会とのパートナーシップを目指して－土木のメディアを考える－	2014年1月号
今こそダイバーシティ推進を！－「違い」を価値に、「多様」を活力に－	2月号
震災復興、奮闘し続ける土木技術－土木技術者に求められる創意工夫と応用力－	3月号
異常気象と激甚化する災害を考える	4月号
暑い国での熱い仕事－湾岸諸国のプロジェクトに挑む－	5月号
「土木観光」の現在－土木への好奇心を後押しする取組み－	6月号
アセットマネジメント導入から10年－どこまで進み、その成果と課題は何か？－	7月号
交通と一体的に進める持続可能なまちづくり－都市における環境負荷の少ない交通システムの活用－	8月号
土木の教え方－実践型教育の取組み－	10月号
ドボクの民活－新たな仕組みへの挑戦－	12月号
空間情報のシンカーサービスの融合がもたらすイノベーション－	2015年1月号
大学における国際エンジニア育成－ASEANに日本土木ファンを、日本にASEANファンを－	2月号
東日本大震災 復興最盛期を支える土木の力－社会基盤施設における復旧・復興の最前線－	3月号
土木学会創立100周年－豊かなくらしの礎をこれまでも、これからも－	5月号
CIMから広がる新たな世界	6月号
巨大地震に備える－想定される南海トラフ巨大地震とその対策	7月号
深層崩壊に挑む	8月号
地域とともに確かな未来を築く土木技術－新たな第一歩－	9月号
これからの社会ニーズに応える構造工学	10月号
オリンピック・パラリンピックに向かって－東京の未来を考える－	11月号
河川管理のいま－変化をとらえ、守る－	12月号
ゼネコン新時代	2016年1月号
国際協力の現場で光る日本の知恵と技－海外での土木技術者の挑戦－	2月号
土木史研究の今－強まる社会との関わり－	4月号

土木と UAV－利活用の可能性を考える－	5月号
広がる土木景観の役割	6月号
土を活かすマネジメント－新たな課題解決に向けて－	7月号
気象予測と土木－気象予測技術の最前線－	8月号
復興，そして創生へ－土木の力で地域を元気に－	9月号
人のこころを動かす，土木	10月号
新たなモビリティと人びとの暮らしの変化	11月号
地域創生と学－地域を育む土木の「知」と「人」－	12月号
気候変動への適応の時代	2017年1月号
海外事業のプロジェクトマネジメント－多様化するニーズへの対応－	2月号
橋梁技術の未来	3月号
再生可能エネルギー－持続的な開発を目指して－	4月号
土木のデジタルイゼーション－ヒト・モノのデータ活用と IoT の可能性－	5月号
現場イノベーションプロジェクト－次世代に繋ぐ生産現場のあり方－	6月号
コンクリートから未来への貢献－さらなる環境負荷低減の実現に向けて－	7月号
地下街は快適ですか－いま，都市の地下空間を考える－	8月号
地域の真に豊かな明日を築く－新たな国富の形成に向けて－	9月号
分野横断インフラ維持管理技術の開発とその社会実装－戦略的イノベーション創造プログラム（SIP）－	10月号
世界の衛生問題に立ち向かうバイオニア－環境工学が担う SDGs の目標達成に向けて－	11月号
海洋開発シンポジウム	12月号
魅力ある建設業への再生	2018年1月号
深層学習は土木を変える？－AI 活用の可能性を探る－	2月号
豪雨災害から命を守る－過去の経験と教訓を活かし，犠牲者ゼロを目指す－	3月号
これからの鉄道事業のあり方－新たな価値の創出と持続的発展－	4月号
土木を切り開く材料の可能性	5月号
問いつづける土木－土木の領域を再考し，為すべきを成すために－	6月号
復興・創生－新しい東北に向けて！－	7月号
近代日本を創った精神を知る－明治 150 年－	8月号
北海道におけるイノベーション創出のために－未来に向けて北海道の土木技術が担うもの－	9月号
雪に挑む土木	10月号
日本品質を世界へ－質の高いインフラシステム海外展開－	11月号
道路交通の未来を語る	12月号
土木における多様な教育手法が目指す先－情報教育やアクティブラーニングの重要性－	2019年1月号
都市が縮退する時代における土木の役割	2月号
建設業界の働き方改革	3月号
これからの時代の土木技術者の「学び」を考える	4月号
インフラマネジメント－ファイナンスやリスク管理からみるこれからのあり方－	5月号
火山列島に生きる－歴史が教える過去の教訓・現代の課題－	6月号
変わる土木，変わらぬ使命，－土木が支えた平成の 30 年を振り返る－	7月号

みなとの魅力—人，モノ，情報の融合—	8月号
激甚化する自然災害，挑戦する土木—レジリエントな社会の構築に向けて—	9月号
グリーンインフラ—その最前線と可能性—	10月号
Welcome to JAPAN!—人材の国際化が進む国内 DOBOKU—	11月号
土木，宇宙へ—宇宙開発における土木の役割—	12月号
巨大地震・自然災害に備える—災害時情報の収集・伝達と早期復旧への活用—	2020年1月号
原物なき現実世界—進化し続ける Virtual Reality—	2月号
対話する土木—今，ダムから考える—	3月号
水辺の国土史—豊かな暮らしを創るエンジニアリング—	4月号
次世代交通と土木—新たなモビリティの可能性—	5月号
インフラマネジメント技術の国際展開—産官学連携による成果と今後の展望—	6月号
東京オリンピック・パラリンピック—次世代の日本を見据えて—	7月号
今から見つめる古代の土木	8月号
守る・攻める・変わる—持続的な成長を支える土木の変革—	9月号
インフラ維持管理の現場が求める本当の技術革新とは—インフラ DX—	10月号
ごみと土木 2020—知っておきたい，最近のごみのこと—	11月号
災害情報の新たなステージへ—住民とともに災害に立ち向かうために—	12月号
さあ，AIを始めよう—土木工学への AI 導入のススメ—	2021年1月号
多様性万歳！ 島で生きる	2月号
被災地から未災地，次世代へとつなぐ—復興の10年—	3月号
30代の土木	4月号
土木教育—「できない」を言い訳にしない質の高い教育の実現に向けて—	5月号
設計と技術者と図面	6月号
鉄道と道路—多様化する社会のために—	7月号
新しい国土	8月号
首都圏インフラのビッグ・ピクチャー—生活経済社会の礎を築く土木—	9月号
カーボンニュートラルと土木	10月号
まだ知らない土のこと	11月号
地域建設業の代替わり	12月号
福島復興へのあゆみ	2022年1月号
鉄とコンクリート	2月号
土木を描く	3月号
Ally へ繋がる途	4月号
土木と地政学	5月号
流域治水	6月号
コンクリートダム・山岳トンネルの現場史	7月号
土木遺産を学ぶ旅	8月号
「文明化された社会」をこえて—土木学のめざすもの—	9月号
交通の未来—コロナによる転換を見据えて—	10月号

第1章 各部門の記録

海洋土木のフロンティア	11月号
土木の 이슈ー31	12月号
世界からみた日本の土木	2023年1月号
災害遺構に学ぶ 2023年2月3日更新	2月号
こころ弾む次世代建設現場	3月号
コンサルティングの醍醐味	4月号
理想の国土を実現するために—キホンとギモン—	5月号
これからの時代の土木学会誌のありかたを考えよう	6月号
橋梁の未来に思いを馳せる	7月号
土と木	8月号
不確実な時代における土木の新たな挑戦	9月号
関東大震災から100年	10月号
資格は誰のために	11月号
NO 上下水道 NO LIFE	12月号
みんなで育てようパブリックなオープンスペース	2024年1月号
土木のパラダイムシフト	2月号
働き方改革	3月号
インフラに関わる地域の人々	4月号
中堅・若手の考えるこれからの土木	5月号
土木と広報	6月号
Ally がつくるインクルーシブインフラ	7月号
今からはじめるネイチャーポジティブ	8月号

備考：総会，全国大会関連，小特集，カレンダーなどは除く。